三刀屋城跡調査報告書

——I——

昭和57年3月

島根県

三刀屋町教育委員会

序

三刀屋城跡は周知の遺跡として、県内外にかなり評価をされながら、これまであまり調査研究をなされないまま今日に到っている。かつて昭和十六年に郷土史家中村隆一氏によって、「三刀屋城址」が発刊されているが、それは三刀屋氏十四代の史実を中心とする歴史書的な色彩が強く、城郭そのものについてはふれていない。

三刀屋城は、富田城、三沢城とともに出雲の三城と目される代表的な山城である。しかも十四代三百六十余年間の三刀屋氏の居城として、雲南の中枢的役割を果した城の文化財的価値は大きいと考える。

この度、昭和五十六年度から数か年にわたり、これまであまり調査されていない城郭を中心に、山城の研究をすすめ、同時に三刀屋氏の歴史上のナゾの部分も明らかにしたいと考えている。

本書はその第一年次の中間報告である。

昭和 57 年 3 月

三刀屋町教育委員会

教育長　古　瀬　　明

例　　言

1. 本調査は、昭和５６年度国庫補助事業として、昭和５６年６月１０日から昭和５７年３月３１日まで実施したものである。

2. 本調査の事業主体および体制は次のとおりである。

(1) 事業主体　三刀屋町教育委員会

(2) 事務局　三刀屋町教育委員会社会教育係長　永塚久守

(3) 調査員　島根県埋蔵文化財調査員　杉原清一

(4) 調査作業員（順不同）

田部重夫、田部律子、陶山利正、片寄　弘、重富福太郎、杉原　聡、森山　崇、狩野美代子、千葉利子、陶山京子、片寄貞子、杉原圭子、鈴江道子、景山武三郎

3. 調査にあたって、次の方々に指導助言をいただいた。記して謝意を表する次第である。

（敬称略、順不同）

島根県教育委員会文化課主査　藤間　亨
〃　〃　係長　勝部　昭
島根県立図書館資料課長　藤岡大拙

4. 調査にあたって、次の方々に協力をいただいた。記して謝意を表する次第である。

（敬称略、順不同）

難波此清、木次一吉、渡部重信、伊藤一助、景山武三郎

5. 本書の編集、執筆、写真撮影は、杉原清一、永塚久守が担当した。

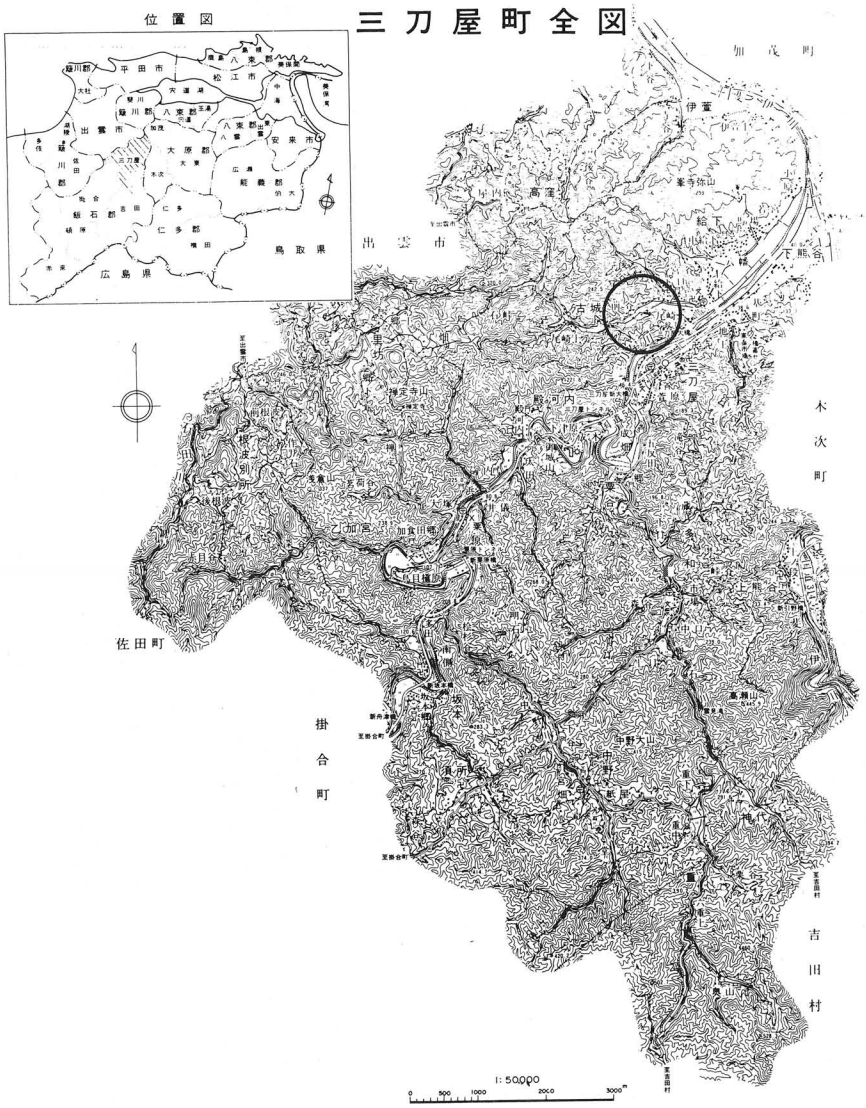
目　　次

調査にあたって …… 1

調査結果の概要 …… 2

三刀屋氏について …… 6

写真・図版 …… 8

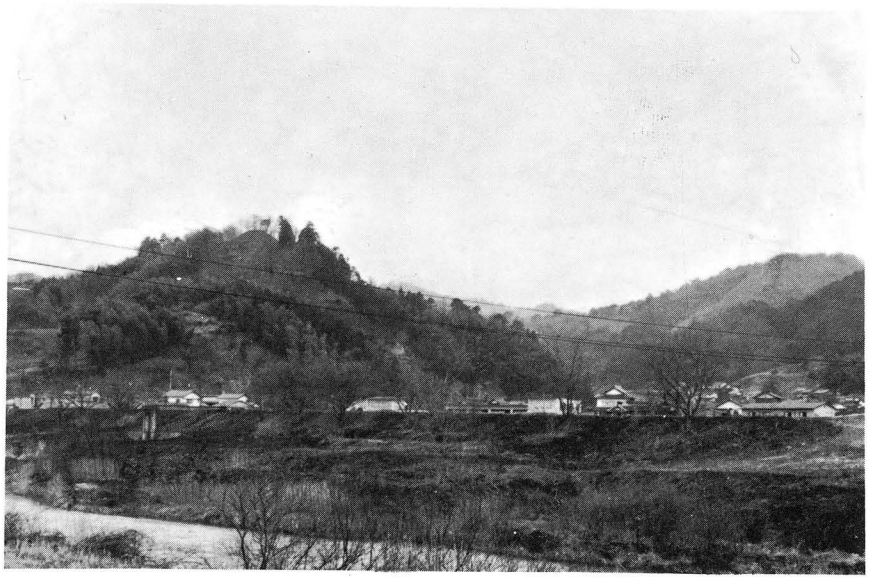


調　査　に　あ　た　っ　て

三刀屋城跡は、中世この地を支配した三刀屋氏（はじめ諏訪部氏）の居城跡であるが、いままで未調査のためその全容がつかめていなかった。

近年に至り、山裾部が宅地化されるなどしだいに開発の動きがみられだしてきたのに対処して、この遺跡の今後の保存活用に資する目的で、このたび本格的な調査を思いたったものである。

この調査事業は、本年度を第１年次としおおむね３年次計画によって、三刀屋城およびそれに関連する遺構のすべてについて、総合的な解明を試みようとするものであり、したがって単なる発掘調査にとどまらず、切図や古文書（特に検地帳）などによる地名の悉皆調査や伝承・伝説の収集、家号の調査なども採り入れた。その結果、現在のいわゆる三刀屋城とは別にそれより古い典型的な山城遺構の所在が確認され、三刀屋氏の居城がある時期に移動したこと、さらに現在の三刀屋城もその後改めて整備し直されたと考えられることなどが明らかになりつつある。本年度の成果をふまえながら来年度以降の調査に期待するものである。



城山城郭（左前方）とじゃ山城郭（右後方）

調　査　結　果　の　概　要

1. 付近の山陵を踏査の結果、城山の城郭（城山城郭）以外に、さらに高い独立峰の通称じゃ山の山頂部において典型的な中世の山城（じゃ山城郭）を確認し、また字後谷・本屋敷の後背尾根端部（本屋敷城郭）、前谷・中垣後背中山頂部（中山砦）及び大谷・天満宮の小山（大谷砦）、舞戸谷口丘陵端（舞戸砦）の各遺構を認めた。

これらの配備構成は、じゃ山城郭を根城とし、東西約1.5キロメートルの範囲に所在し、東北東の本屋敷城郭と舞戸砦は主要居館地帯と思われる後谷に面しており、また屋内越道（出雲市方面に連らなる）に対する防備でもあろう。西方の大谷砦は里坊越（出雲市方面へ）と石峠越（奥出雲地域へ）の分岐点に位置し、要衝であり、この沿線上に中山砦が位置することになる。じゃ山城郭から東～南方向は展望が開けているが、三刀屋川沿い部分が死角となり、これを補うかのように城山城郭が在る。

城山城郭は石塁を多用し、横矢構や重層的な郭群で構成し、天主台に近い構築法の櫓台を有するもので近世的な手法が見られるのに対し、じゃ山城郭群は積石はほとんど用いず、切岸、土塁堀切り等で構成されており、天水池も設けてあるなど中世の手法である。また、じゃ山城郭では青磁器や陶器片が茶臼片と共に採取され、これにより室町時代と判断された。

本年度は踏査の外に、城山城郭については主郭部分の測量と試堀を行い支郭や腰郭についてその配置をみた。じゃ山城郭についてはとりあえずの略測図を作製した。またこの付近一帯の主として山地について小字地名を調査し結果を得たが、耕地等一部未完了である。

この地名についての検討は今後であるが、「本屋敷」「門」「門所」「御崎谷」「御蔵前」など居館を示唆するものや、「城山」「大門谷」「切通し」など城郭構成を示すものが認められる。

2. 城　山　城　郭

三刀屋川に沿って東にのびる丘陵の先端を堀切りによって独立させ、東及び南東に派生する支尾根を用いて南東に開く馬蹄形の地形で構成し、挟まれた谷地形が大手門口となる。

城郭の範囲はおよそ東西４５０メートル、南北３００メートルで、北側は急峻な山腹であり、主に南～東側に大小１１０以上の多数の郭を配備したものである。

本丸は巾１５～２０メートル、長さ７０メートルほぼ長方形の郭で、東端に頂部５×７メートル方形、高さ４メートル石垣積みの物見櫓台があり、さらに西端二丸郭に面してＬ字

形の石垣土塁を設けている。二丸郭は１５×４０メートルで西端部には北面して低土塁を設け、西方尾根との間に巾約５０メートル、深さ２０メートルの大堀切りで完全に切断している。

この本丸、二丸を中心とする主郭部分から南へ下る尾根に小郭が階段状に連らなり、さらに東へ屈曲する支尾根基部には大石垣の郭があり、さらに大門谷を見下ろす尾根端上に郭を配置している。

主郭東端は落差の大きい郭が階段状をなし、その端部から北～東の三方へのびる低い支尾根の基部は横手道で連絡する郭があり、さらに尾根先へと郭が続く。特に東へのびる尾根は堀切りで区切られて独立の郭群をなし、天神丸と呼んでいる。

石垣を用いた郭構成もこの城跡の特徴とするところで、本丸の櫓台や土塁壁面のほか、二丸その他の主要部の外壁面にみられる。しかし支尾根上の支郭群にはなく主郭を中心とする高位の部分に限られている。

石積みの手法は、石材を横長手に用い、角石を先に積み中間部分は大小適宜組合せて用い、「二番」で築いた野面乱積みの雨落しの無い単勾配である。

櫓台の石垣は巨石を用いてあり、崩壊が著しいが、四周を石垣で囲み、本丸から斜行する石段で登る構造のようで、小形の天主台の祖形を思わせるものである。

大門谷奥から登りつめた二丸東端に虎口があり、これを見下ろす本丸郭外縁に石垣で張り出した横矢構を設けている。この虎口から二丸に上り、さらに本丸西端のＬ字形石垣壁土塁の外を迂回して本丸に至る道となっており、土塁端部の庭面には石貼り床面がわずかに認められ、最終段の城戸の存在が伺がわれる。なお裏門は史料によると、天神丸との堀切りを東へ下った福谷口にあったとしている。

水源としての井戸については知られていないが、「殿井手（とのいで）」と呼ぶ用水路が城山北を流れる古城川の約３キロメートル上流から引かれ、主郭東端の天神丸尾根基部あたりまで断続的に遺構がみられる。

本丸と二丸においてトレンチ試堀を行ったが、すでに重機による削平部分のみで、遺構面は確認出来なかった。郭外に排土した撹乱土中から瓦器坏の細片と陶器類の細片が若干出土した。

3. じゃ山（やま）城郭

字大谷・字案田（あんだ）の堺に所在する標高２４７メートルの独立した通称じゃ山の山頂部を主郭とするもので、約１００メートル×１５０メートルに２３の郭がある。低く派生する尾

根は東の案田方向～南の尾崎方向に長くのび、西の大谷方向は尾根が高く突出する地形である。北は急に下降する陵で石曲(いしまがり)谷奥の面を切岸とした防堤状の峠に至る。

山頂部南寄りが最高所で山腹も急峻であり、視界は開けて奥出雲地方の山々から木次・大東方面が展望出来る。この位置を主郭とし堀切りによって区画され、東西に第二郭第三郭を配備する。

東の第二郭から北へ階段状に横長三段の郭があり、その中には別に小さな「馬出し」状の堀り凹めた小郭もある。此所から北へ急下降して石曲奥峠に至る陵上は浅い堀切りと帯郭と小郭を設けこれを連絡して登る道が認められる。

主郭の北側は、西の第三郭とに囲まれる形で北西に開くややゆるやかな凹地形をなしており、そこには天水池が二段に設けてあり、この池に面する小郭がある。井戸は見当らない。またこの池の畔から青磁の碗片や古備前の擂鉢片・常滑系大壷片などが表面採取された。

北斜面の帯郭からの横手道はこの池で分岐して主郭と西側大堀切りへそれぞれ連絡する。

池の下段から北西に派生する小支尾根は浅い堀切りで切断され、尾根端には五段の小郭が設けてある。

主郭西の郭から細長い郭を経て大きな堀切りで尾根を切断し、さらに西にのびる尾根上は通路と狭く長い帯状郭が併行して、尾根端部には物見様の小郭群がある。

大堀切りは上端巾が２０メートル以上もあり、堀底に二条の畦を設け、さらにその両側各四つの凹入部分が認められる。これは落し穴状のものとみられ、「畦堀」「障子堀」等と呼ばれるものであろう。

堀切りは、以上の他に南下する支尾根基部と、東に長く下る尾根基部にも設けてあり、またこれらの堀切り部から急斜する山腹へ直下する竪堀りがあり、合せて七本が数えられる。

このじゃ山城郭への登路は、北の石曲り奥峠から、東の本屋敷城郭から、及び南の御崎谷からそれぞれ尾根筋路が認められる。

なお「三刀屋家文書」にある「石丸城」はこれを指すと思われるが、今後の検討を要する。

4. ま と め

調査中途のため、見通しを記してまとめとする。

三刀屋郷における城郭の歴史は、承久の変による新補地頭として来住した諏訪部（のち三刀屋）の約３８０年間と、その後短期間ではあるが多賀、堀尾の在住期間を加えて約４

００年の長期にわたる。

諏訪部の、地頭として来住当初の居住は字後谷地区で、本屋敷城郭が最も初期の拠点であろうとみられる。

やがて諏訪部は三沢と並んで出雲国人衆の筆頭格に成長し、戦乱の続く室町期には、尾根伝いに登りつめた〝じゃ山〟の頂上に強固な郭を縄張りして根城とし、各支尾根に郭や砦を配備し網羅して大規模な城域を形成したのである。詰城として天水を利用し、青磁器や古陶器、茶臼などは、その勢力を示唆するものと云えよう。勿論城山城郭もこの城郭網の重要な一角を占めていたものと考えられる。しかし館はやはり後谷地内と思われる。

出雲の支配が尼子から毛利へと移るころ、戦法や地域社会の発展に伴って奥飯石～山陽地方への主要路線が三刀屋川沿いに変り、そこには町並みが展開し始めるなど近代化が始り、それによって城山城郭の重要性が増し、ために、地域支配の拠点としての本城を、山城であるじゃ山城郭から平山城である城山城郭へと移して整備し、家臣団の館も尾崎・前谷地区へ進出したと思われる。城内の水源である殿井手も〝鉄穴井手（かんないで）〟の手法でこのとき開削したものであろう。

城山城郭の遺構は元和の一国一城令によって破却された姿であり、少なくとも中世の城郭そのままの姿ではない。前記のように主郭部の平地面は昭和３０年代公園化のため重機によって破削されており建物跡等の遺構は検出出来なかった。また支尾根の諸郭等も元録４年（１６９１）検地帳で既に山畑となっており、郭内の遺構の検出は困難と思われるが、残っている石垣や郭の構造等に近世初頭とみられる手法が用いられており、三刀屋氏末期の居城であったのを、その後、おそらく堀尾修理代に支藩的陣屋の意味をもっての大改修が行われたと推察される。殿井手を用水とする城山中腹の館跡推定地も同時のものであろう。

今後さらに、未踏査部分の砦分布と館跡推定地の確認や、地名についての考証を資料文献との接点で推進し、郭についての試掘調査や、基礎資料としての遺構の実測は引き続き実施しなければならない。

特に、島根県内で本格的な山城の全容を調査した先例は少なく、じゃ山城郭は遺構がかなり良好に保存されており、しかもその規模が第一級とみられることから、出雲地方中世城郭の重要な山城跡である可能性がうかがえる。

三刀屋氏について

三刀屋氏は、はじめ諏訪部氏といい、承久の乱（承久３年、１２２１）に戦功があって西下した、いわゆる新補地頭のひとりである。「三刀屋文書」によると、諏訪部氏は清和天皇の孫経基を始祖とする清和源氏の一族で、信濃を中心として伊豆、甲斐、遠江などに勢力を張る豪族であったが、１０代助長（扶長、扶永などとも）の代に至って承久の乱が起り、幕府方に味方した助長はその思賞として、はるか出雲国三刀屋郷の地頭職を命じられたものである。

可令早源助長為出雲国三刀屋郷地頭職事

右人依勲功賞可為彼職之状依仰下知如件

承久三年九月四日

陸奥守平（花押）

（三刀屋文書）

なお、「みとや」の地名が、従来の「御門屋」「三刀矢」「三屋」にかわって「三刀屋」と出てくるのは、これがはじめてである。

さて、こうして三刀屋郷の地頭となった諏訪部氏であるが、前述のようにもともとこの一族の本拠地は東国であったから、すぐに三刀屋に移ってきたかどうかは疑問である。「三刀屋文書」の中には、おそらく前任者だろうと思われる者との領有についての紛争に対する下知状などもみえている。諏訪部氏の三刀屋郷への実質的な支配力が固まってくるのは、文永８年（１２７１）の「干家文書」にみえる「諏訪部三部入道子（助親。助長の孫）」あたりになってからであろうか。この当時の三刀屋郷の面積は「２１丁」（町）である。

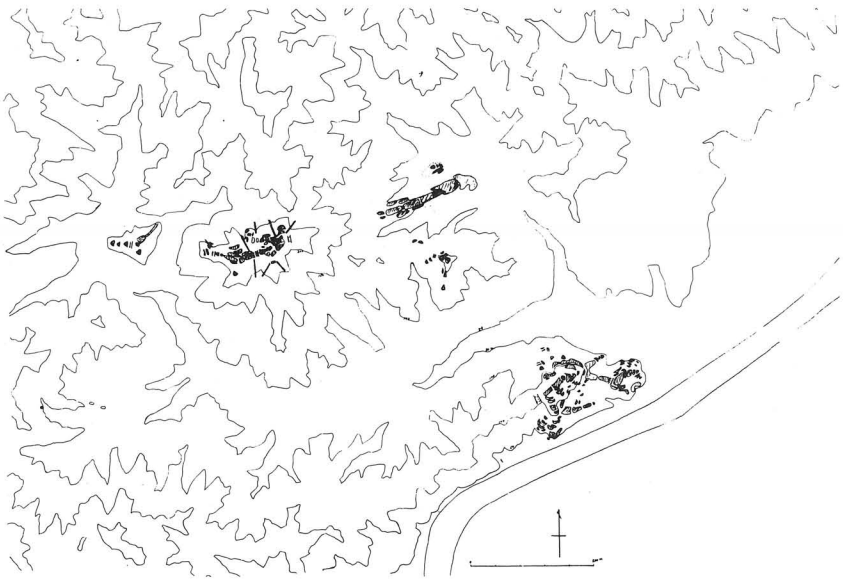
その後、諏訪部氏は地名をとって三刀屋氏を名乗り、戦乱の時代を巧みにくぐり抜けて、戦国時代末期の天正年間まで連綿としてこの地を支配しつづけることになる。特に、南北朝期と大内・尼子・毛利が中国制覇を賭けて壮絶な戦いをくりひろげた戦国末期には、出雲を代表する豪族としてしばしば軍記物などに登場してくる。わけても、三刀屋氏最後の当主久扶は、三沢・赤穴両氏などとともに尼子・大内・毛利の間を往き来し、主として出雲南西部における一大勢力にのし上っていった。

しかし、いったん毛利氏によって中国地方一帯が平定された時点で、山陰山陽を結ぶ交通の要衝に位置する地理的な重要性と、毛利氏に降るまでのあまりに巧みな遊泳術の報い（？）

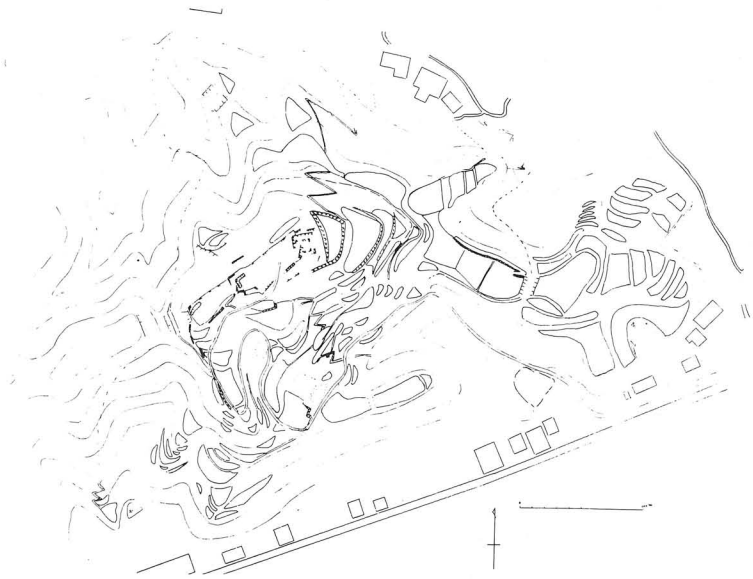
からか毛利輝元にうとまれ、結局天正１６年（１５８８）ごろ領地改易のうき目に合い、約３７０年にわたる支配に終止府を打って、この地から去らざるを得なかったのである。

なお、三刀屋氏歴代の動向については、「三刀屋町誌」（昭和５７年７月刊行予定）を参照されたい。

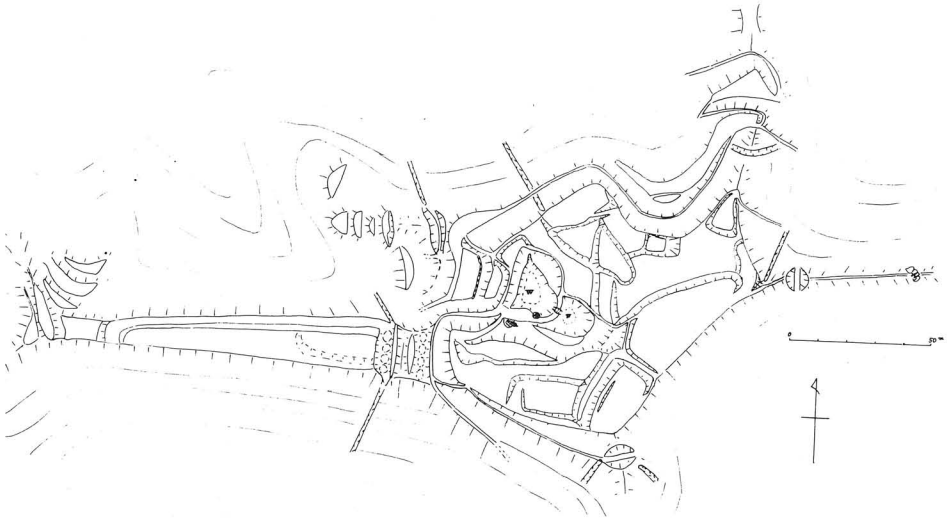
大字古城地区の小字地名図（部分）



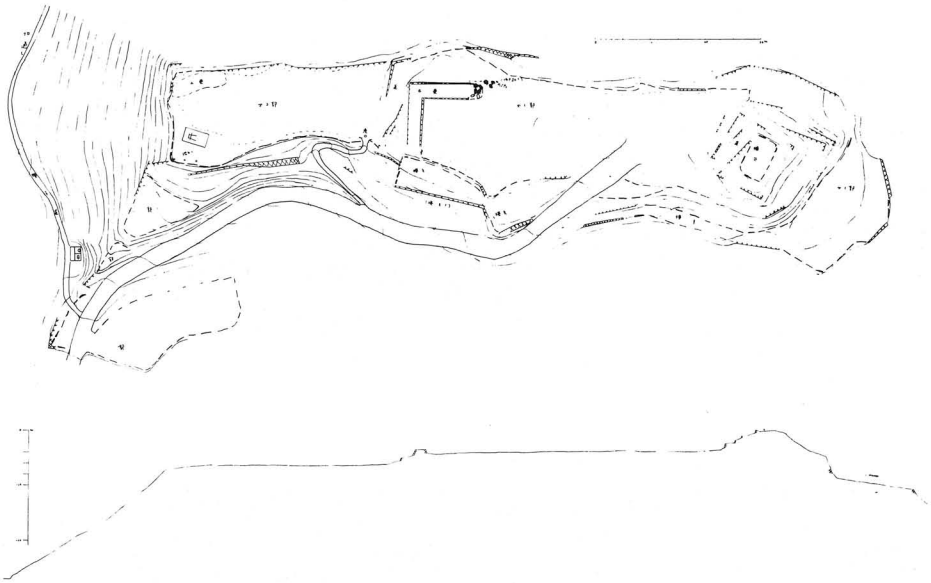
城　郭　配　置　図



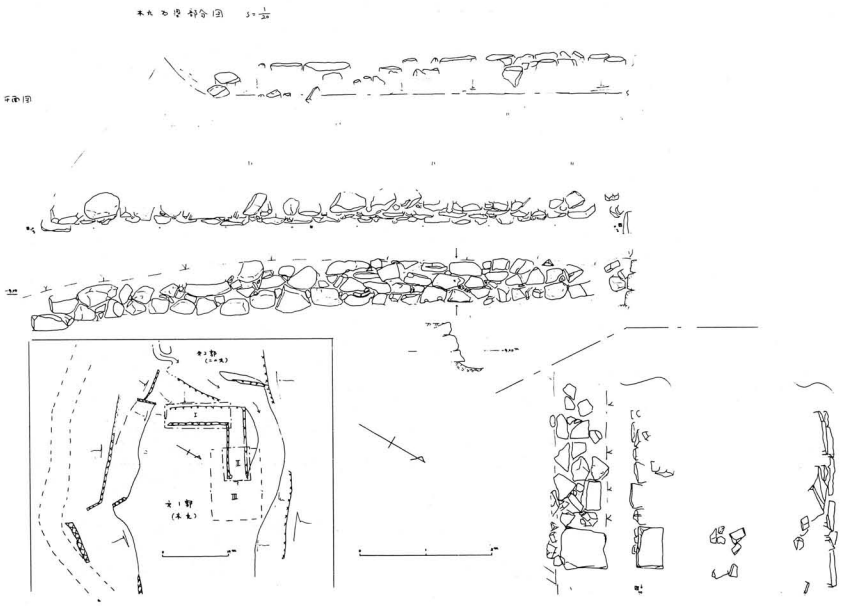
城　山　城　郭　略　測　図



じ　ゃ　山　城　郭　略　測　図

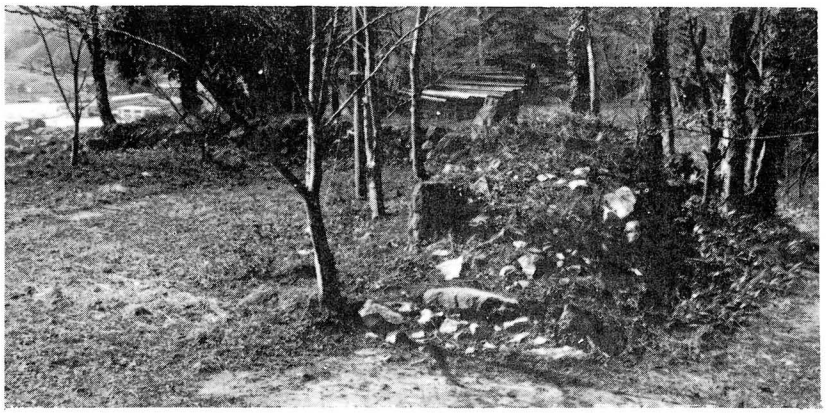


城山城郭主郭付近実測図

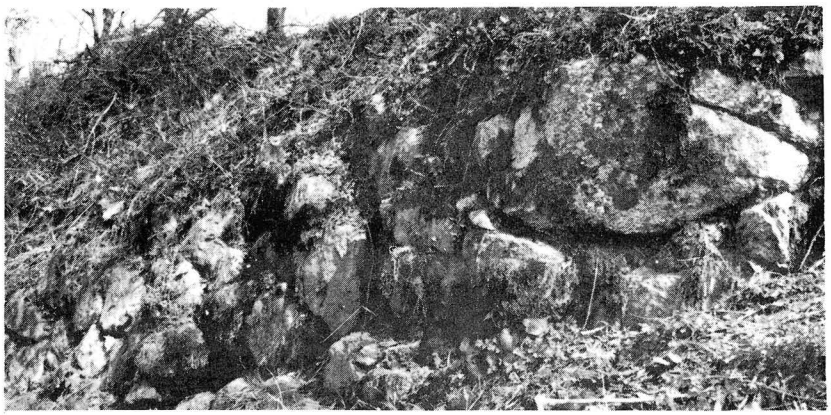


同上部分図（本丸石垣土塁）

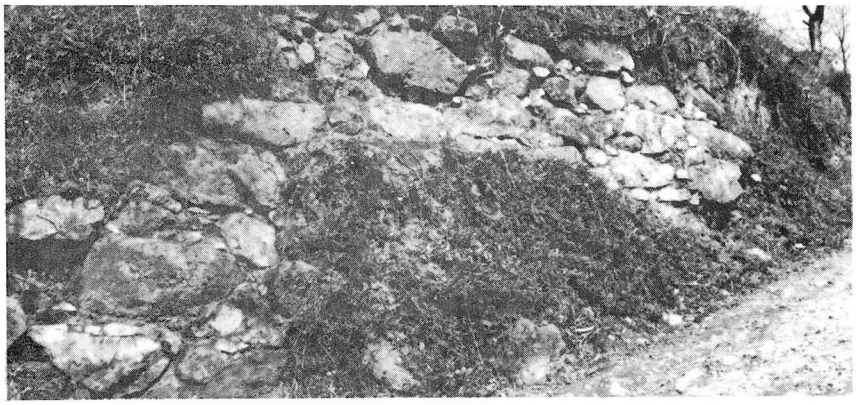
城山城郭（遠望）



城山城郭本丸と石垣

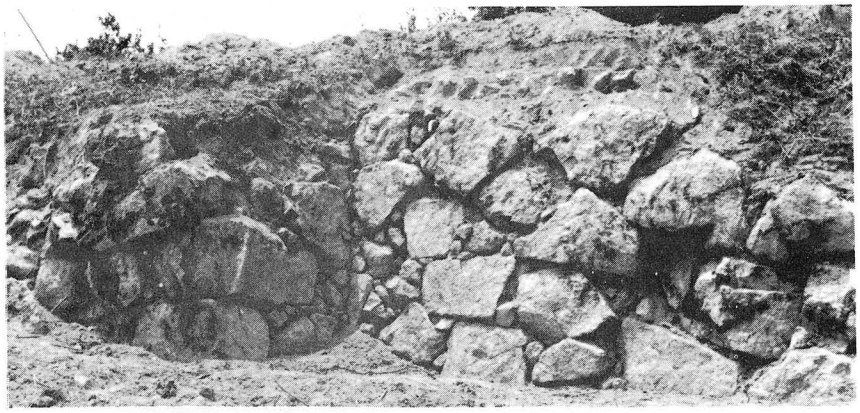


城山城郭石垣（本丸下）

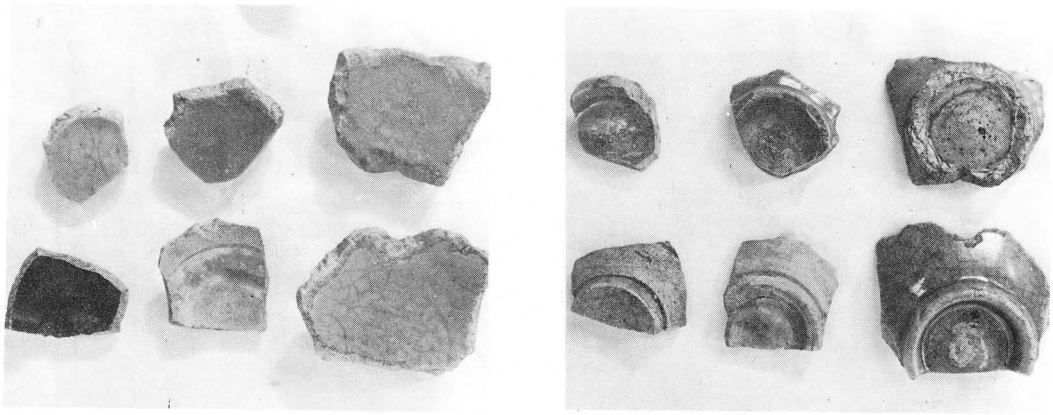


城山城郭石垣（本丸下）

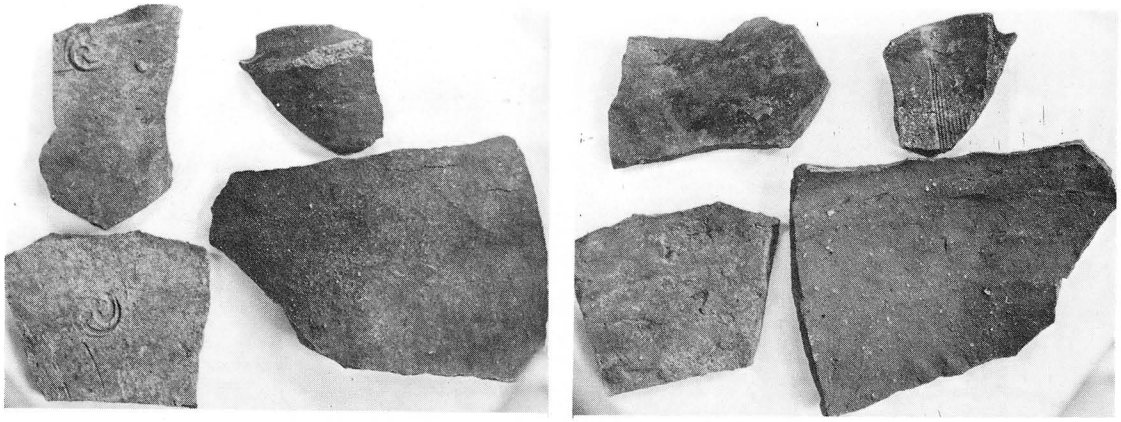
城山城郭石垣（二ノ丸下附近）



城山城郭石垣（伝馬舎郭下）



陶磁器片（じゃ山城郭表面採取）



常滑系大壷片（じゃ山城郭表面採取）

茶臼片（じゃ山城郭表面採取）

三刀屋城跡調査報告書

—— I ——

昭和５７年３月

発行　三刀屋町教育委員会

印刷　(有)木次印刷